

団塊の世代に属して

(財)リバーフロント整備センター 専務理事 砂川 孝志



この原稿を書いている時点で、世の中はニッポン放送株の話題でいっぱいである。その評価は別にして、マスコミで流れる街頭インタビュー等を聞いていると、当事者とそうでない人とで、そして世代間によって評価が分かれるという印象を受けた。

誰の小説であったか忘れたが、“老人二人が仕事の合間に若い世代への不満をさんざん言い合っている、さて仕事に戻ろうと二人は奈良の大仏の建設作業に向かって行った”、という短編があった。いつの時代にも時代が変化していくときには、世代間の争い、意識の違いということは避けられない。

私はいわゆる団塊の世代に属している。戦後の混乱や貧しさがまだ残されている時に生まれ、その後東京オリンピック、大阪万博に代表される、高度成長時代をくぐり抜け、学生時代にはいわゆる大学闘争真っ盛り、その後オイルショックを経て、さらにはバブル景気そしてその崩壊も経験した。そして今やリストラの対象であり、年金問題でやり玉に挙げられる世代でもある。どの世代もそうかもしれないが団塊の世代も山あり谷ありの変動の時代を通過してきている。

団塊の世代は個人の意志とは別に、どの時期、子供、壮年、実年の各時期にいつも人口増という圧力を日本の社会に与え続けてきた。それが時には経済を活性化させる原動力にもなり、時には急激な都市化を促進したりもした。そして最近ではリストラ対象で、年金問題もあり、あまり良いイメージではとらえられていない。しかし、戦後、国際社会が激しく変化するなか、日本が一定の地位を占められるようになったのは団塊の世代が寄与してきたものがあるのではないかと（個人の能力だけではなく総体として）と、そこに属するものとして秘かに考えている。その一方、上昇思考的社会に育ってきたことにより、環境問題を始め、多くの課題をも社会に残してきている。

そして、これからは日本は人口減少時代を迎える。人口減少時代においては、土地開発圧力はおそらく減少する。したがってこれからは土地利用のあり方を考える良い機会になる。これまでの人口増加のためのやむを得なかった土地利用を見直し、より適切な土地利用を目指すことが可能になる。もちろんそこには国土をどう管理するかという哲学、思想も絡んでくることにはなるだろう。

河川という目で見れば、流域という視点でをどういう土地利用が適切か、どう管理するかということになる。治水面から見ても河川だけの視点から、流域を視点においた総合治水対策、特定都市河川浸水被害対策と進められてきたが、さらに今年の災害を受けての総合的な豪雨災害対策についての緊急提言においても見られるように、（と私は考えているが）今後の方向としては土地利用のあり方に帰着すると思われる。環境面から見ても、最近自然再生事業への取り組みに見られるように、河川環境が流域の社会生活、土地利用の鏡であるという認識や自然環境の連続性ということから、流域という視点が強調されている。利水面では当然人口をどう配置するかによることになり、土地利用と直接に絡むことになる。これらを総合的にとらえる水循環もしかりである。

土地利用を変化させるといふと無機的な感じになる。しかしそこに人間が生活する以上文化、風土というものがあるのが必然的に生まれてくる。それが潤いのあるものであってほしい。団塊の世代は古き良き、文化が体にしみについている最後の世代だと思う。時代の流れをみながらこれを次代に伝えていくことも意義あることだろう。人口減少時代の新しい土地利用に、人口増大時代を作った団塊の世代が潤いを与えればこんな良いことはないと思うが。団塊の世代は時代の流れの中で身につけたたかき、逆の面での優しさがあり、意外にしぶとい。それをいかした、これからの担う役割も団塊の世代にはあるのではないだろうか。